

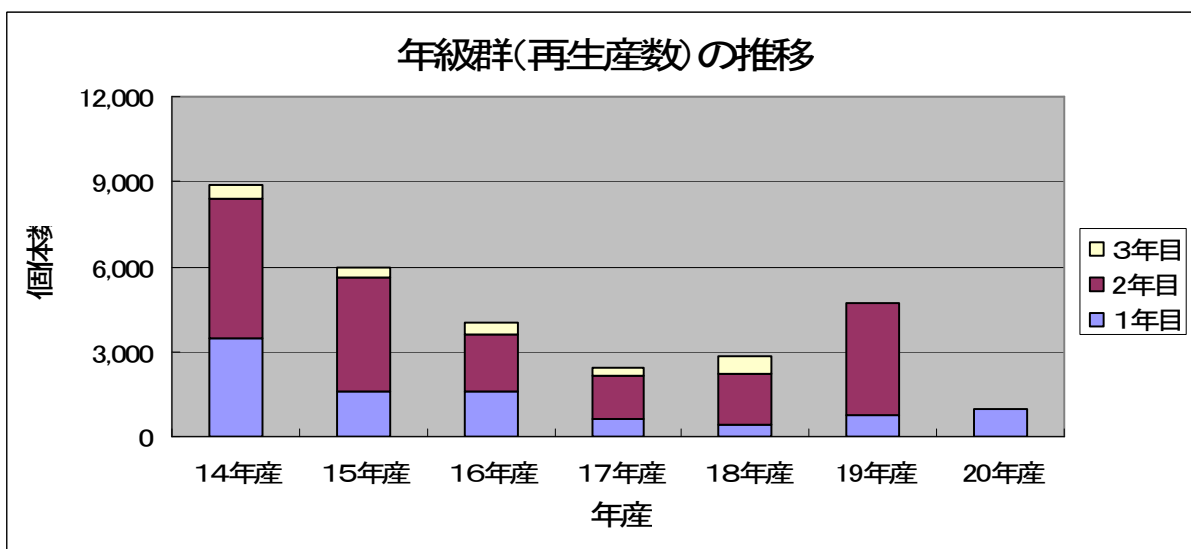
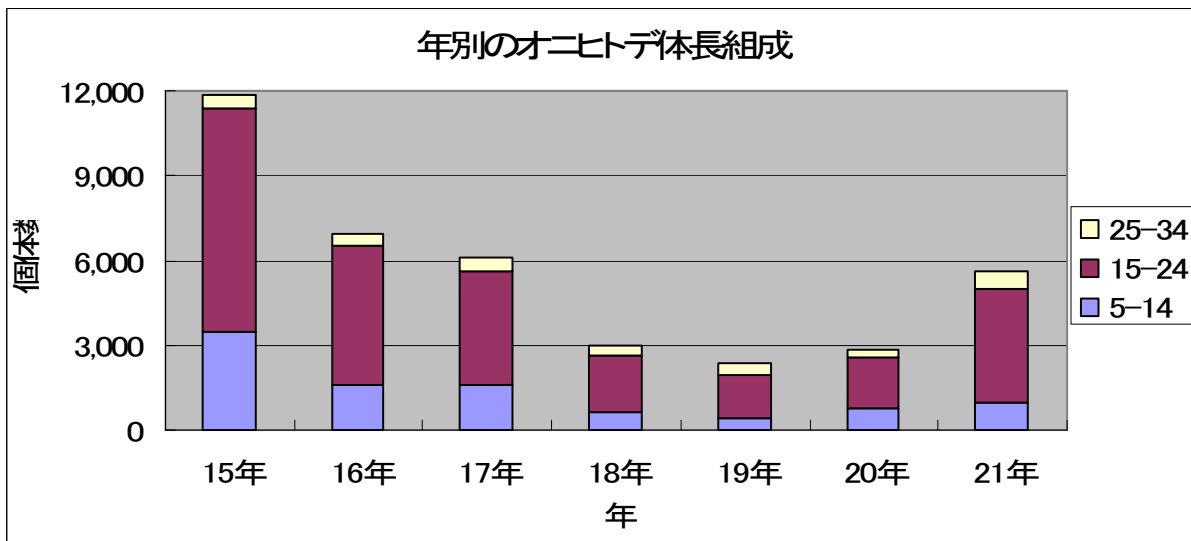
## 5. 年級群の推移

年級群とは、同じ年に生まれた数を示したものです。オニヒトデは、産卵1年後で直径約 10 cm、2 年後で約 20 cm、3 年後で約 30 cm となります。各年に捕獲したオニヒトデは、大まかに分けると 5～14 cm サイズは 1 年物、15～24 cm は 2 年物、25～34 cm は 3 年物とします。

年別のオニヒトデ体長組成を見ると、平成 15 年から減少し、平成 19 年に一番少なく、その後増加に転じています。これを、年級群に組み替えてみると、平成 14 年産から減少し、平成 17 年産が一番少なく、その後増加に転じていることが分かります。

平成 18 年の報告書によると、北側海域に稚サンゴが増えたことが記されており、サンゴの回復に伴いオニヒトデも増えたこととなります。平成 3 年の報告書にも小さなサンゴの多い海域にオニヒトデも多いと記されています。また、平成 19 年の報告書では、産卵期の台風直撃の影響として、波浪によって直接オニヒトデにダメージを与えることと、幼生の拡散により再生産数の減少を期待していましたが、19 年産は逆に増加する結果となっています。

オニヒトデの再生産が収束したことを確認するまでは、駆除努力を緩めないことが重要だと思います。



## 6. 地先別体長組成と駆除努力量

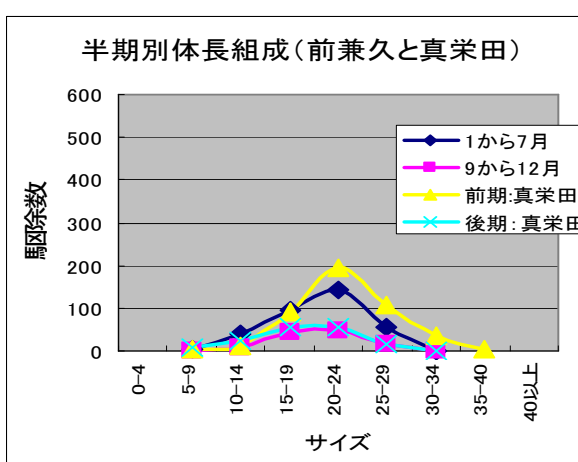
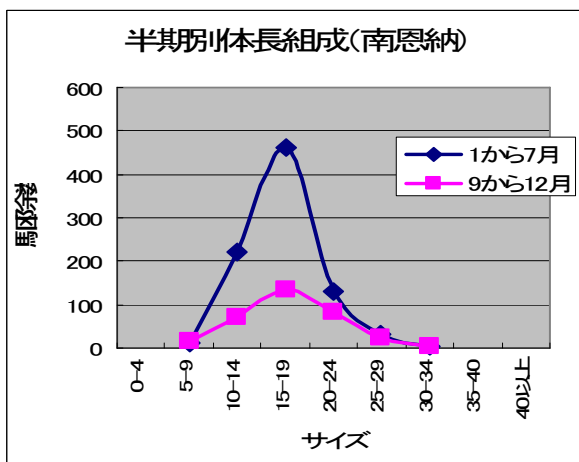
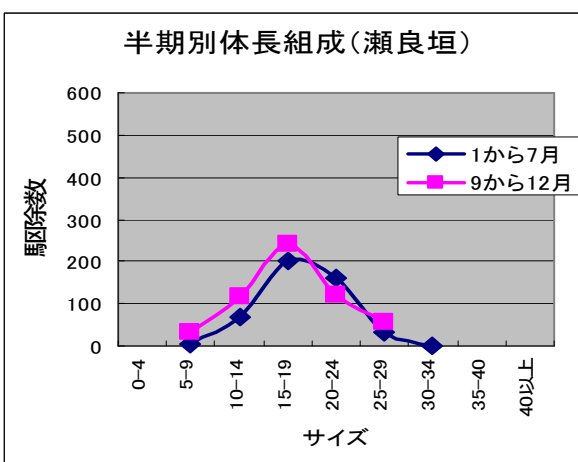
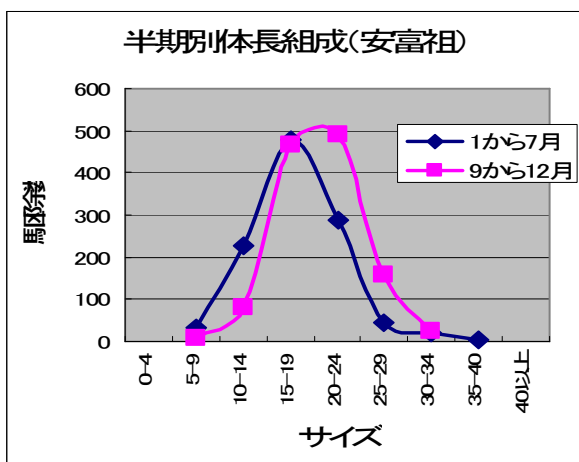
オニヒトデの再生産を抑えるためには、取り残しが無いように駆除することが重要です。今年前期の駆除努力量が適正であったのか、地先別体長組成により検討します。

期間別の駆除回数と参加者は、表4に示しました。前期の駆除努力量は 26～60 名/海域で、南恩納と安富祖海域に努力量を集中したことがわかります。後期は、各海域を駆除し密度の高いところから追加して駆除を行いました。

表4. 地先別駆除日数と参加者(平成21年)

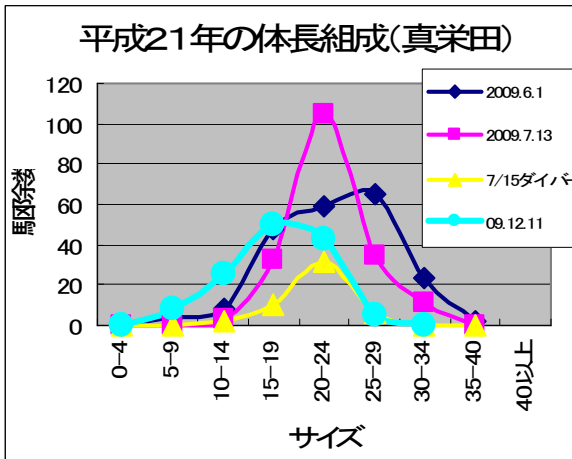
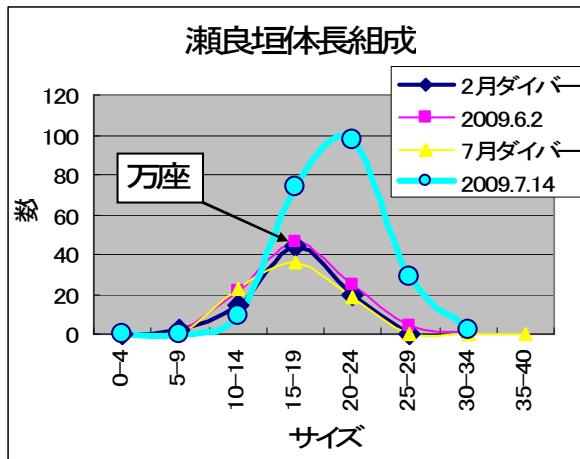
	安富祖	瀬良垣	南恩納	前兼久	真栄田	計
前期駆除回数	2	4	2	2	3	13
前期参加者	54	26	60	31	36	207
後期駆除回数	4	4	2	2	2	14
後期参加者	89	45	34	20	26	214
参加者前期比	165%	173%	57%	65%	72%	103%

前期と後期の体長組成の比較は、大型化と駆除数で見ます。北側の安富祖海域で大型化が見られ、瀬良垣海域ではほぼ同規模の集団となり、南恩納海域で駆除数が減少し、前兼久と真栄田海域で駆除数の減少と小型化が見られます。前期は、北側に行くに従い、駆除努力量が足りなかったこととなります。後期は、密度の低下が見られるまで駆除したので、北側に行くに従い駆除努力量が高くなっていきます。



## 7. 潜水器による駆除の効果

平成20年は、潜水器を一部導入した結果、前兼久や真栄田などの広くて浅い海域の駆除には素潜りが適しており、急な礁斜面(ドロップアウト)では、ダイバーによる駆除が適しているとの感触を得ています。平成21年は、2月と7月に潜水器を使用して高密度集団を駆除しました。その海域は、大型化を抑制しており効果的に駆除することができました。



## 8. 平成22年度の駆除方針

平成22年は、北側海域を重点的に駆除します。また、高密度集団が見られる場所は、潜水器による駆除を多用します。

## 9. 編集後記

平成21年前半の駆除は、漁協単独と村内事業所のボランティアにより何とか駆除活動ができました。後期からは、県自然保護課の「オニヒトデ緊急駆除事業」を導入し、大発生への連鎖が心配される海中公園地区～瀬良垣海域を重点的に駆除しました。また、今年度から水産庁、沖縄県、恩納村による「環境・生態系保全活動」を導入することができました。平成22年度からは、大発生を未然に防ぐため、より実効性のある駆除ができるものと期待しています。関係者の皆様には、来年度も今年度同様の支援をお願いし、駆除にご協力して下さいました皆様に感謝いたします。

## 10. 恩納村のサンゴ

深場にあるクサビライシ類は、オニヒトデによる食害を受けやすいとの報告もあります。



トゲクサビライシ、真栄田、平成21年11月10日      ヘルメットイシ、安富祖、平成21年12月8日